

『キリストを模倣する反キリストー獣の国の特徴とは?』 ～黙示録 13 章～

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏

今日はいよいよ黙示録 13 章を、皆さんと一緒に見ていきたいと思います。

今 アメリカが生んだ巨大企業で、よく言われる 5 つに GAFAM (ガーファム) があります。

G ; グーグル。A ; アップル。F ; フェイスブック。A ; アマゾン。M ; マイクロソフト。

これらのアメリカ企業は世界中から富を吸い取っているわけですが、これらの本社は潤いますね。シリコンバレーやシアトルは潤うわけです。これらは、国境を取っ払って世界を 1 つにして行こうという思想の中で動いている企業です。

そういう考え方に対して、“いやいや、国民国家を優先すべきだ” という立場に立ったらどんなことになるのか、というのがよく分かる事件が今年の 1 月にあったんですね。

2021 年 1 月 1 日、ボリス・ジョンソン政権のイギリス政府が EU から完全に離脱しましたね。

その結果何が起こったか？ 新年最初のロンドンシティの営業日に大異変が起こったんです。

イギリスは昔 労働組合の力が強くて、イギリス病と言われて、全然 GDP が上がらなかった。

しかし、サッチャー (1925-2013) という“鉄の女” が現れてサッチャー革命、様々な規制を撤廃することによって、ロンドンのシティという所がヨーロッパの金融の中心になることができた。

これによって、イギリス経済がガーンと良くなるんですよ。

ところが、1 月 1 日に EU 完全離脱ということで、今年最初の営業日 1 月 4 日に何が起こったかというと、60 億ユーロ以上もの株式投資のお金がシティからザーッと逃げて行って、オランダのアムステルダムに行ったんです。以後変わってません。

ロンドンシティは一夜にして、ヨーロッパ最大の金融中心の座を譲り渡したんです。

なぜそのように転落してしまったのか？ ハッキリ申し上げて、ポーダレス形態に背中を向けて、“国民国家としてやっていくんだ！” という立場に立つと、どんなに歴史や文化や伝統やスキルがある国でも、繁栄は逃げて行くんです。

そこでイギリスは、今年 2 月 1 日、TTP に正式加盟を申請してますよ。今 TTP の中心は日本です。

TTP は元々 EU をモデルにイメージしている“環太平洋経済パートナーシップ” と言われてます。

EU から出たら、それに代わる地域国家の中に加わっていかないと、「どこもお付き合いしない単独国家で、今まで通りやっていきます」と言うのと、21 世紀はもう生き残ることができない時代です。

今世界はどんな潮流で動いているかというと統一政府です。

世界はグローバル、統一政府・統一経済に向かってずーっと動いているのであって、それに抗って、“うちの国はうちだけでやっていきます” と主張するなら、すぐに貧しい国に転落してしまう。

先ほどの GAFAM、グーグルの創設者セルゲイ・ブリンは旧ソ連の人。

アップルの有名なスティーブ・ジョブズ、お父さんはシリア人。中東の人。

フェイスブックの現在の CEO エドゥアルド・サベリンはブラジルからの人。
アマゾンではジェフ・ベゾフ。養父はキューバからの移民。
マイクロソフトの現在の CEO サティア・ナデラはインド人。

私は今から 2 年前にシアトルに行きました。シアトルにはマイクロソフトの本社があります。
本社の近くはインド料理店ばかり。良いホテルに泊めてもらったんですが、その半分以上はインドの人です。ここホンマにアメリカか？みたいな。

最近よくニュースになるテスラ。電気自動車の会社で宇宙開発もする。あのイーロン・マスクは南アフリカ出身。

そして、賛否両論 色んなこと言う方もいますが、ファイザーの新型コロナウイルスワクチン。
ファイザー製の物が 1 番効果があると言われてはいますが、実際これを開発したのはビオンテック〈バイオンテック〉というドイツの会社で、創設者の夫婦はトルコ人。

今 世界全体を市場にしている企業は、国境とか国家主権とかについて殆ど頓着しないですね。
国のボーダーの枠を超えて行動しているので、採用している人間も国の枠を超えています。
そういうところに富も・情報も・人材も吸い取られていくんです。

なので、“これから単独でやっていきます”。これはもう、やればいいけど、やれば必ず没落するという
ことで、世界は地域国家から 1 つの国、ボーダーのない 1 つの国…。
グローバル経済とよく言うけど、グローブは地球という意味です。
1 つの地球、その方向に向かって世界の潮流が流れている。それに抗うと没落する。
21 世紀生き残って行くことが出来ないみたいな。

バイブルを読むと、大昔から、“世の終わりには、世界は 1 度統一政府の下にまとまる。”
世界は今 約 200 の国々があるけど 1 つの国になる。だけど、やがてそれが上手くいかなくなって、
10 のブロックに分かれる。すなわち 10 か国の連合になります。
10 か国連合のうち 3 つの国が欠けて、最終的に 7 か国連合になるのですが、その時、世界は人類史上
最低最悪の時代を迎えます。

7 か国連合の時代は 42 か月〈3 年半〉続きますが、かつて人類がこの世に産声を挙げてから今日に至
るまで、最も恐るべき・おぞましい・苦しい・大患難時代になるのです。
なぜなら、3 年半続く 7 か国連合の時代、その国は反キリスト帝国だから。
悪魔の意のままに動くことの出来る人物が治める反キリスト帝国。

反キリストがどんな人物かを、集中的に詳しく説明している箇所が**黙示録 13 章**なんですね。
人類がやがて突入する 7 年間の患難時代、後半 3 年半は大患難時代です。
この後半 3 年半の大患難時代に、7 種類の主要な登場人物がいて、**12 章と 13 章**で前もって説明して
るんですね。7 種類の登場人物のうち 5 つは、既に**黙示録 12 章**のところで説明しました。

今日は残りの 2 つ。海から上って来る獣と地から上って来る獣。
海から上って来る獣が後半の 3 年半、反キリスト帝国の主人公である反キリスト。

地から上って来る獣が反キリストを補佐し支える偽預言者。
サタン・反キリスト・偽預言。悪の三位一体（さんみいったい）。

13章にどんなことが書いてあるのか、まずざっくり言うと、今日は3つにまとめます。

- 1) 大患難時代に登場する反キリスト帝国〈7か国連合〉は、どんな形で、どんな特徴があるのか。反キリストの国について。
- 2) 後半3年半、悪の帝国をコントロールする反キリストに何が起こって、どんなことをするのか。反キリスト個人について。
- 3) 大患難時代に希望はあるのか。

13:1 また私は、海から一頭の獣が上（のぼ）ってくるのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。

海から獣が上って来た。その獣には10本の角と7つの頭があって、10本の角には10の冠があった。この異様な姿をした獣は何を意味しているのか？ 世の終わりに世界を統治する反キリスト帝国です。

なぜなら、そういう帝国だということを、旧約聖書の中で前もって説明している箇所があるんです。ダニエル書7章。そこで、この箇所を理解するために、まずダニエル書7章に飛んで、そこから一緒に考えたいと思うんですね。

ダニエル7:1-7

1. バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエル〈という預言者〉は寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。

バビロンの王ベルシャツアルの元年は西暦でBC553年です。今から約2600年前に書かれたんですね。

2. ダニエルは言った。「私が夜、幻を見てみると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。
3. すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

旧約聖書の中で、大海は必ず地中海を指すんです。“大きな海”は太平洋や大西洋ではありません。古代ヘブル人はそんなこと知らないです。旧約聖書の中で“大きな海・大海”が出て来たら、例外なしにいつも地中海。地中海世界を支配する異邦人世界が大海です。この異邦人世界、特に地中海世界をコントロールする国が出て来る。

4. 第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見てみると、その翼は抜き取られ、地から身を起こされて人間のように二本の足で立ち、人間の心が与えられた。

4頭の獣の1頭目は鷲の翼を持ったライオンで、バビロンのことです。なぜ分かるか？

バビロンの古代遺跡の発掘物の中から、鷲の翼をつけたライオンの彫像が出て来てるんですね。これが国家のシンボルとして採用されていました。だから、ここで言っているのは鳥の王者 鷲の翼をつけた百獣の王ライオン。これはバビロンです。バビロンが中東世界を支配する。

5. すると見よ、熊に似た別の第二の獣が現れた。その獣は横向きに寝ていて、その口の牙の間には三本の肋骨があった。すると、それに『起き上がって、多くの肉を食らえ』との声がかかった。

2番目は熊。メド・ペルシアのことです。横向きに寝ていてと翻訳されていますが、原文では“片側が上がっていた”。なぜ、横向きに寝てと翻訳したのか？

うつ伏せや仰向けではなく横向きに寝たら、両腕の一方が下になって、もう一方が上向くじゃないですか。

バビロニア帝国を滅ぼしたのはメド・ペルシア。これは、メディア帝国とペルシア帝国が連合形態で治めた国です。メディア・ペルシア帝国。メディアの方がペルシアよりもはるかに大きかったんです。この連合国を造ったキュロス王のお父さんはペルシア人、お母さんはメディア人。お母さん側のおじいさんはメディアの最後の王様ですが、関係が良くなかったんですね。

最終的に、ペルシアがメディアを食っちゃうんです。一方の側が下って行って、一方の側が上がる。最終的には、アケメネス朝ペルシアという帝国になるんですね。

アケメネス朝ペルシアは3つの国を滅ぼします。リディア・バビロン・エジプト。

これが、口の中にある3本の肋骨です。

6. その後（あと）、見ていると、なんと、豹のような別の獣が現れた。

その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。

その後（ペルシア時代の後）、ペルシア時代を終わらせる国、ペルシアを滅ぼす国が出て来る。

その国は3番目、アレキサンドロスの帝国ギリシアです。

アレキサンドロスは33歳で死にますが、彼の死後、国を継いだのは息子ではありませんでした。

4人の部下が広大な大帝国を4つに分割し、それぞれが独立して権勢を振るって行くけど、最後まで生き残ったのが、セレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプトです。

このシリアとエジプトの両方を滅ぼす国が次に出て来ますね。ローマです。

7. その後（4つの帝国の後）また夜の幻を見ていると、なんと、第四の獣が現れた。それは恐ろしくて不気味で、非常に強かった。大きな鉄の牙を持っていて、食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。これは前に現れたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。

豹の後に出て来る4番目の獣。ダニエルは特にこの4番目に注目しました。

今4頭の獣の話をしてきましたが、獣は何を意味するのか、ダニエル書7章の中にちゃんと定義付けしているの、まずそこを確認します。

ダニエル 7:17, 23-26

17. これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。

異邦世界から出て来る4人の個人の独裁者。つまり、獣は人を表している。

それぞれの帝国の英雄というか創始者・独裁者個人のことだと言っています。

23. 彼はこう言った。「第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。」

第四の獣は地に起こる第四の国。先ほど、獣は人だったけど、ここでは人/王ではなくて国。

つまり、この幻のたとえで獣と言った時には、“大帝国そのもの”と“大帝国の独裁者”の2つの意味があると理解しなければならないんです。

獣は人の意味でもあり、その人が支配している帝国の意味でもある。

国の意味でもあり、独裁者の意味でもある。これをまず押さえておいてください。

それを知ることが黙示録を解く鍵となります。

この第4の国は、厳密に見ると、ローマの流れを汲んでいるけど、ローマそのものではないんです。終末時代・患難時代の前に、終末時代に現れる世界統一政府のことだと言えるんですね。何段階かあるんですけど。

第4の獣は恐ろしくて不気味で、それまでの帝国とは比べものにならないおぞましい凄い国。それは地に起こる第四の国。単数形です。1つの国。メド・ペルシアみたいな2つの国ではない。

これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし。

それまでのバビロニア帝国・ペルシア帝国・アレキサンドロスの国々、これらは大きいですよ。バビロンはそんなに大きくなかったけど、ペルシアって、東端はインドの一部、西端はアフリカまで行ってるんですよ。アフリカからインドまで1つの国。非常に大きな国。でも全地じゃないんです。

だけど、これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし。全地球です。

全地球を意のままに支配する単一の国。すなわち、全世界は1つの国になる。

今約200ある全ての国は、1つの統一政府の下にコントロールを受ける時代がやって来ます。

“世の終わりには世界統一政府が現れる”という根拠はここです。

この統一政府の国家の特徴は、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。

ローマという国は、どこを発祥にするかによって違うのですが、1200年以上続きました。

なぜそんなに寿命が延びたのか？ローマは、支配した国をいつまでも被支配国として扱うのではなく、ローマの市民権をバンバン与えて、ローマに愛国心や愛着を持たせるために優遇しました。

だから、ローマに対する反抗心がなくなって、結果として息長—く存在することが出来た。

しかし、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。ローマはそんなことしてません。

これはローマに当てはまらない記述です。ローマの流れを汲んでるけれど、全世界を地球的規模で、全地をグローバルに統一する国。これが第1段階です。

第2段階。

24. 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後（あと）に、もう一人の王が立つ。

彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。

この世界統一政府国家から**十本の角**が生えて来ます。これは**十人の王**だと書いてますね。つまり、世界は10か国連合に割れるんです。今200ある国が10のブロックに分かれて、いずれかの地域国家群の中に吸収されながら10の連合体になります。これが**十本の角**の意味です。

彼らの後に、もう一人の王〈11人目〉が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。

11人目は、10人の王のうち3人の王が支配している3つの国を滅ぼす。

その結果、10か国連合が7か国連合になってしまいます。

この7か国連合の時に、打ち倒した人物〈反キリスト〉が自らを神と名乗り、神に向かって恐るべき冒瀆の言葉を語るようになります。

25. **いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。**

彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは一時と二時と半時の間、彼の手になねられる。

いと高き方の聖徒たちを悩ます。

聖書の神を信じている人たちがたくさん殺される時代が来ます。しかし、それは永遠には続きません。

聖徒たちは一時と二時と半時の間、彼の手になねられる。

1年と2年と半年の3年半だけ、反キリストが猛威を振るう。

26. **しかし、さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。**

何によって滅ぼされるのか？ キリストの地上再臨です。

さて、今言ったことを頭に入れながら、もう1度**黙示録13章**に戻ってください。

1. **また私は、海から一頭の獣が上ってくるのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。**

その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。

獣には“国家”の意味と“個人”の意味があると申しあげましたね。ここでは国家のことです。

異邦世界から異邦人の国が現れる。その異邦人の国には**十本の角と七つの頭があった。**

その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。

十本の角は王のことでした。10か国連合でスタートした帝国です。

しかし、**七つの頭**と書いてますね。なぜ10本の角と10個の頭じゃないんでしょう？

3か国は反キリストによって滅ぼされるからです。

7つの頭については、**黙示録17章**で本当の意味を紹介したいと思います。

実は、ローマ帝国は7つの発展段階を経て、最終的に反キリストの国になるんです。

それを説明しようと思ったら、ローマ帝国1200年の歴史をお話しなければなりません。

もうとてもじゃないけど、今日の時間に収まらないんですよ。なので、17章に来た時に、ローマがどのように変わって来たのかをお話するので、その時まで今しばらくお待ちください。

さて、その国の特徴について考えたいと思います。**1節**の獣は国としての獣です。

しかし、**2節**に出て来る獣は、個人/独裁者/反キリストを指していると思われます。

2. 私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。
竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。

2 節の前半部分は国のことでしょう。反キリストの国にはどんな特徴があるのか？

豹に似ていて、熊に似ていて、獅子〈ライオン〉に似ていた。

豹はアレキサンドロスの国。熊はペルシア。ライオンはバビロンでしたね。

すなわち、かつて存在した3つの帝国の特徴を受け継いでいるのが反キリストの帝国なんですよ。

①豹＝ギリシア＝西欧文明のルーツ・ヘレニズムの根源と考えていいと思います。

今の民主主義はどこで生まれたか？ ヨーロッパです。西ヨーロッパの人たちが民主主義をどうやって学んだかということ、古代ギリシア文明をヒントに学んだのです。

古代ギリシア文明は都市国家〈ポリス〉で、それぞれの町ごとに出来上がっています。

アテネという都市国家があって、人口30万のうち18万人が市民。12万人は奴隷。

奴隷は“ものを言う家畜”で、人権は一切認められていない。

もちろん投票権なんか持ってない。彼らは人間として扱われていませんでした。

古代ギリシアの民主主義は奴隷制度によって支えられている民主主義で、今の民主主義とちょっと違うんです。

18万人のギリシア市民の中で、女性には参政権はありません。

女性は子供を産む道具と思われていて、人格ある者として認められていませんでした。ギリシアで。人間じゃないんです。人間なのに人間じゃない。人格持たない。ので、人格的關係が持てないんですね。すなわち、男と女の間に愛が成立しない。もちろん男は女を可愛がりますよ。ギリシア人も。でも、その“可愛がる”は、今で言うと、愛玩動物をペットにして可愛がるのと同じような愛です。どんなにペットを可愛がっていても自分の伴侶じゃないでしょ。そういう可愛がり方。

人格を持っているのは男だけです。だからギリシア文明では、愛は男同士の間で成立するんです。ホモセクシュアルですよ。それが美しいことでした。

さて、18万人の中で成人男性は4万人。この4万人が、アゴラという広場で民会（みんかい）という会合を持ちます。民会はギリシア語でエクレシア。

“エクレシア”が、今新約聖書で“教会”と訳されてるんですね。

民会は毎週あんねんけど、4万人が集まったら大変ですよ。大体6千人くらいが集まりました。

民会で、アテネの将来こうしよう・ああしよう、色々話す。

皆さん、今政治に関心がありますか？ “趣味；国会中継見ること”って、あんまりいてないんじゃないですか？ あれ、でも、時々面白いですよ。腹立つけど。

彼らがそのようにやったのはなぜかということ、暇でヒマでしゃあなかったんです。

だって、一切働かないんですから。週休二日制じゃない。週休七日制や。労働は全部奴隷がやる。

自由な成人男性・市民はブラブラして、暇でヒマでしゃあない。

なので、ヒマだからこそできる素晴らしいものが出来たんですね。哲学です。

忙しいと哲学できません。人類史上最初に哲学した人はギリシア人です。
最初に彼らが考えたのは、“この世界は何で成り立っているのだろうか。”世界の成り立ちを考える。
これがギリシア哲学の最初で、これを自然哲学と言いますが、今の言葉に言い換えると自然科学です。

タレーズ（BC624頃-BC546頃）は「万物の根源は水である。全ては水から出て来た」と言いました。
今の私たちの知識から考えたら「なんか幼稚やん、そんな考え」と言うかもしれませんが、これは画期的なことなんです。何が画期的か？
人類文明の中で最初に、神様抜きで世界の成り立ちを説明しようと頑張ったんですよ。

色々な古代文明は、“神から生まれて来ました”ということで始まっているんです。
バイブルだって“初めに神が天と地を創造した”でしょ。
ギリシア人はギリシア神話の神々を信じているでしょうが、一旦哲学モードに入ると、神様は一旦横に除けといて、頭の中で論理で“この世界は何で出来上がっているんだろう。組み立てられて行くんだろう”と考えていったんです。

そして、デモクリトス（BC460頃-BC370頃）はこう言いました。「この世界の根源はアトムである。」
アトムとは原子です。「目に見えているものは細かく分割していくと、最後これ以上は分割出来ないという単位になる。それを原子と呼ぼう。この世界に存在するものは、全て原子によって出来ている。」
これ、今の物理学に通じるじゃありませんか。当時のギリシア人は実験道具何も持ってない。
頭の中の論理だけで、ここまで肉薄したんですよ。

ギリシア哲学は論理なんです。もっと言うと合理主義。西欧合理主義。
反キリストの国の特徴の1つは、ヘレニズム文明の特徴を受け継いでいることです。合理主義です。
自然科学を崇拝すると思います。科学の可能性があったら、モラルとして首をかしげることがあったとしても“やっちまえ！”みたいな。既に今、それが起こっているんじゃないですか？

②熊＝ペルシア。ペルシアは人類史上初めて、オリエント世界を統一した国です。
バビロンは自分の周辺の国々を固めたけど、オリエント〈東洋〉、中国を除くインドまでの世界を統一したいいわゆる東洋思想。

ペルシアは2度世界を制覇するんですね。1回目はアケメネス朝。それから500年以上あけて、ササン朝ペルシアが世界を制覇しました。この2つのペルシア帝国に共通するのは、ゾロアスター教の国ということです。ゾロアスター教。ゾロアスター、ツァラトウストラです。ニーチェが言った。

ゾロアスター教には2人の神様がいます。光の神様〈アフラ・マズダ〉と闇の神様〈アーリマン〉。
目に見える全ての現象は、この2人の神様の格闘によって起こっている。
例えば、“今日出勤じゃないと思って寝坊したら、実は行かなあかんかったと後で気づいた。これは、アーリマンが勝ったので寝坊したんだ”と解釈するんです。
“何で、こんなにコロナウイルス蔓延してんねん?!” アーリマンがアフラ・マズダに勝ったからや。
“ワクチン出来た!” アフラ・マズダが勝ったから。

日本にもアフラ・マズダを信じている方がいます。自動車メーカーのマツダ、文字で書くと MAZDA。

“ツ”がtsuとかじゃなくてZ。マツダじゃなくてマズダ。濁点になってる。
マツダの創業者がアフラ・マズダを信じているから。そんな話、どうでもいいんですけどね。

アフラ・マズダはペルシアからシルクロードを通して中国に入りました。
中国でビルシャナという神になり、朝鮮半島を経て日本に来ると毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）になりました。これが奈良の大仏です。大日如来（だいにちによらい）ですよ。
皆さん、ご存知でしたか？ 東大寺の大仏はゾロアスター教のアフラ・マズダだったんです。

ペルシアの皇帝を拜んでくれたら、色んな宗教が混合していくことについて あまり気にしない。
そして“世界は調和していくものなのだ。自然に任せよう。” 東洋思想なんですよ。
その面があるんです。世界は1つになったという時代に、それがドンドン吸収されていきますね。

③獅子〈ライオン〉＝バビロン＝南ユダ王国を滅ぼした国。

ネブカドネツアル王が BC586 年にエルサレムの神殿を炎上させて、ユダヤ人たちは皆バビロンに連れて行かれるんですね。ユダヤ人たちがバビロンに着いた時、ビックリすることがありました。

バビロンにはモデル国家があったんです。それは、人類史上最初の世界帝国シュメールに造られた古代バビロン帝国です。かつて、そこにバベルの塔を建てて“我々は神のようになるんだ！”言うて。その時まで世界は1つの言語だったのが、その時、言葉がバラバラにされて世界中に散らされた。バベルの塔もそこで破壊されました。

ところがなんと、ネブカドネツアル王はバベルの塔を再建してたんです。
エルサレム崩壊でユダヤ人たちがバビロンに連れて行かれたら、なんと、目を見張るような高さのバベルの塔が見えた。震え上がったんじゃないですか。
バビロンは、古代バビロニア帝国/ニムロデ時代のバビロンを模範にしているのが分かります。

ニムロデ時代のバビロンは天文学が非常に発達してたんですね。
数学は60進法だということが分かっています。1時間は60分。1分は60秒。何でなんですか？
バビロンが60進法だったというところから来てるんです。暦の基準になってるんですよ、これが。
天文学と高度な数学を操りながら、日食・月食などの様々な周期を割り出すことが出来ていたようですね。

そして、そこから星の運行に特別なメッセージを読み込んで、いわゆる占星術とか占いの、生年月日でその人の星が特定されて、性格や人生が定まるようなカルト的な考えはバビロンから来ている。
すなわち、バビロン文明の特徴は、一見科学的だけどカルトなんです。

世界帝国/反キリストの国は、この3つの特徴を持っているでしょう。
西欧合理主義と東洋思想とカルト思想。

これらがそれぞれ流れ込んでいる 非常に獰猛な恐るべき国、それが反キリストの帝国です。

2. 竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。

ここの獣は国ではなく人だと思えます。国と言ってもいいけれども人です。

竜は既にやりましたね。悪魔/サタン。サタンが自分の大きな権威・力・能力を反キリストに渡す。なので、反キリストは超人的な力を持ちます。超自然的なパワーを持つ人物です。では、反キリストにどんなことが起こるのでしょうか？

3. その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。
全地は驚いてその獣に従い、4. 竜を拝んだ。

頭のうちの一つ〈反キリスト〉は死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。

ここは、“死んだと思われたけど、ギリギリ死んでいなかった。死んでいなかったのが回復した”と読めてしまうけど、原文の意味はそうではありません。

死んだんです。反キリストは文字通り、1度息を引き取りました。死んだんです。

何で死んだかという病気じゃない。自死でもない。打たれて死んだ。攻撃されて死んだんです。暗殺されたんですよ。これが起こるのが、患難時代のちょうど中間地点です。

今や世界の万能の解決者・救世主・リーダーの中のリーダーはこの人じゃないか、と皆が認めつつあった人物が打たれて死んだ。“やっぱり、人間死ぬんだなあ”と皆が衝撃を受けますが、より凄い衝撃が次に起こったんですね。復活するんです。

死んだと思われたが〈死んだんです〉、その致命的な傷は治った。

生き返った。死んだのに復活した。キリストのモノマネなんです。

以後 42 か月/3 年半の間、彼は活動します。イエス・キリストの公生涯は 3 年半。

反キリストは、キリストではないのに、自分自身がキリストであるように演ずる人物です。

そして、死んだ人物が生き返ったのを知った時、

3. 全地は驚いてその獣に従い、

4. 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。

「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」

イエスをキリストと信じる人以外の全員が反キリストを拝む。

これは、尊敬するという意味でちょこっと頭を下げるのではなく、神として拝むんです。

彼は自分自身を神と名乗るようになります。つまり“強制されて無理やり拝まされた。”“拝まないと売ることも買うことも出来なくなるので、嫌々ながら拝んだ”というよりも、その前に、“死をも克服できるこの人物って、なんて凄いんだ！”と心酔して、そして拝んだ。

私個人の YouTube チャンネルで、「今の新型コロナワクチンを打つのは 666 の刻印を打つことになる」と言っている人がいて、「だから打ったら怖い」って。あり得ない！それは。

“ワクチン、知らずに打ったんですけど、そんな意味があったんですか?!”って、そうじゃない。

666 は次回お話ししますがね、打たれる人は反キリストに心酔して竜を拝んだ人たち。

その献身の印として刻印を受けるんです。反キリストがこのように人々の礼拝を受け取るんですね。

4. 「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」

これは出エジプト記に出て来る、紅海が割れて渡った時の言葉ですよ。
神に対して圧倒的な賛美をする時の礼拝を、人間に対して使っているのです。

5. この獣には、大言壮語して冒涇のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。

先ほどダニエル書の中で、“いと高き方に向かって恐るべき言葉を口にする”とありましたが、ここなんです。ダニエル 7:25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ますはこのこと。だから、旧約聖書を読んで、初めて新約聖書がよく理解できることになると思います。

彼は大言壮語して冒涇の言葉を吐くのですが、3つのことを冒涇します。

6. 獣は神を冒涇するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒涇した。

◆神の御名；御名は名前ですが、聖書では名前は実体を表します。

つまり、バイブルのヤーウエなる方・在(あ)って在(ある)方・全てのもを存在せしめた方・万物の第一原因者である方。その神をなじります。バイブルの神の全否定をやります。

◆神の幕屋；幕屋はテントのこと。

黙示録を書いたのは使徒ヨハネですが、彼は黙示録以外にヨハネの福音書を書きました。

ヨハネの福音書 1章に、ことばは人となって、私たちの間に住まわれたという言葉があるんですね。

ことば〈イエス・キリスト、神の御子〉は人となって〈人間となって〉、私たちの間に住まわれた。

ギリシア語では“私たちの間に幕屋を張られた。”

神の幕屋とは、肉体というテントを持ってこの地上に1度来られた方。

なので、恐らく受肉したイエス・キリスト。受肉した神のひとり子。

「あんな者は神じゃない！」と言って冒涇します。

◆天に住む者たち；2つの可能性があります。

1) 患難時代に反キリストをキリストとして認めず、拝まなかったことで殉教していく人たち。

反キリストを認めないというのは、本物のキリストを知っている人以外は出来ないことです。

患難時代にイエスをメシアと信じる事が出来た人たちは殉教します。

殉教することによって、彼らの体は地上に残ってても、魂は天に行きます。

既に信じた者たちを罵っている。反キリストが特に目の敵にするのはユダヤ人の信者です。

ユダヤ人を全滅させる事が出来たら、地上再臨は実現しないと考えているから。

特にユダヤ人信者を目の敵にして罵り、虐殺し、死んだ後も罵っている。

なので、こう言うことが出来ます。「反キリストは反ユダヤ」。

反キリストとは反ユダヤです！

反ユダヤ主義や反ユダヤ思想は、反キリストと親和性があります。

今もガザから 24 時間 300 発 撃たれているじゃないですか。
ニッポン中の色んなマスコミがね、「非人道的だ！」 毎日新聞が言ってました。

それに対して、防衛副大臣の中山泰秀（なかやま やすひで）さんが「いや、イスラエルは国だ。
ミサイル撃ってるハマスは国じゃない。アメリカでも日本の公安調査庁でも、テロ組織として指定されている団体だ。テロ組織が国家に向かってミサイル撃ち込んで。
国は国民を守る責任がある。その責任と資格は国際法で保障されている。撃ち落とすのは当たり前じゃないか。そして、彼らが撃てないようにするために、反撃するのは当然じゃないか。」
これが炎上して。

中山さんのお父さんは毎年 1 回、私の講演を聞きに来てくださっているんです。もう 10 年以上。
元大臣です。大阪選出の方ですよ。イスラエルのことについてよく聞いて、「今度、息子にも勉強会で…。」 「ぜひ呼んでください」 って言ってるんですけどね。

ところが何か、イスラエルは帝国主義の巨人で、ハマスは弱者を代弁する正義の味方みたいな、そういう出来合いの道徳のストーリー書きをやってね。それでは世界の現実を読めないですね。
そんなことばかり浴びるように聞いていたら、いつの間にか“イスラエルけしからん。” “ユダヤ人あかんで” ってなるんじゃないですか？
今も色んなところで陰謀論、ロスチャイルドがどうの、ユダヤ財閥がどうのって、ネット見てたらそんな話ばかりです。

この間、ある人が教えてくれました。「高原さん、大変ですよ。高原さん、DS になってますよ。」
DS ってゲームじゃないですよ。私も“影の政府”の一員になったそうです。こんなしょうもない者が、ディープステート。ああ、妄想の世界です。

何を言いたい。反ユダヤ主義は、フツと気がついたら、反キリストの協力者になる道を開きます。

さて、患難時代に救われた者たちへの罵りと採ることが出来るけど、もう 1 つ可能性があるんです。
2) **天に住む者たち**は患難時代の前に携挙した教会、という可能性も捨て切れないと思います。
携挙とは地上から取り上げられることです。1 万人・2 万人じゃない。何千万人・何億人。
地上にいたクリスチャンたちが忽然と姿を消したならば、その時のインパクトはスゴイですよ。

その人たちが前もって語っておいた患難時代のメッセージ・黙示録のメッセージを聞いていた人たちは、反キリストがどれほど華々しいデビューをしても、“こいつの正体、悪魔だ”と分かるんじゃないですか？

携挙された教会のことを、“あいつらは集団自決した”とか“UFO が来てさらって行った”とか、とにかく“携挙というものが本当にあるはずがない。”

携挙という事実を合理的に説明出来るように、まやかしの言葉を語ることで、携挙のインパクトを薄めようとしているのかもしれないかもしれません。そこはもう想像によるものです。

が、その可能性もないわけではないなと思います。

7. 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。

また、あらゆる部族、民族、言語、国民（くにたみ）を支配する権威が与えられた。

獣は聖徒たち（地上でキリストを信じている者たち）に打ちかかって勝ちます。

この人物が最初にやることは黙示録 11 章 7 節。

患難時代前半の 3 年半の間、主にエルサレムで、“黙示録で語られていた時代はまさに今のことだ！”

“旧約聖書で語られていた終末時代とは今のことだ！”というので活動する“二人の証人”というユダヤ人の預言者がいます。3 年半の間、誰も 2 人を止めることが出来ない。

止めようと妨害すると、天から火が降って来て、その者を滅ぼすと書いてあるんです。

11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上（のぼ）って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

底知れぬ所はギリシア語でアブソス。死後の世界の中で“穴”と呼ばれている特定の場所です。

アブソスから上って来たということは、アブソスにいたということ。アブソスは死後の世界ですよ。つまり、この獣（反キリスト）は 1 度死んだ。死んだのに生き返ったということです。

生き返った後に反キリストがやることは、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

これを皮切りに、前半部分でもたくさんの殉教者が出ているけど、患難時代後半は凄まじい数の人々が殉教していきます。

そのような状況の中で 3 番目のポイント。今日の結論。希望があるのだろうか。

9. 耳のある者は聞きなさい。

10. 捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣（つるぎ）で殺されるべき者は剣で殺される。

ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。

捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣で殺されるべき者は剣で殺される。

これはひと言で言うと、神の報復の原則です。

大患難時代に聖徒たちを迫害し、捕囚として連れて行った者は、やがて神によって、自分自身が捕らわれの者となって、死後の世界に連れて行かれます。

大患難時代に聖徒たちを弾圧し、剣で殺した者たちは、やがて神によって、自分自身も裁きを受けて殺されます。聖徒たちにしたことは、自分にそのまま返って来ます。報復の原則です。

自分で復讐する必要がありません。神が代わりに報復なさいます。

7. 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。

誰に許されるんですか？ 創造主なる神が許可をしているので、それをすることが許されているんだけど、いつまでも許可され続けることはない。必ずこの悪には終わりがある。

先日、フランスのブサンソンという所で事件がありました。ブサンソンでは国際指揮者コンクールがあって、小澤征爾（おざわ せいじ）さんが優勝。一躍世界のオザワとしてスタートを切ったんですよ。そのブサンソンにも、なんと、我らがマクドナルドがあるんですね。我らがというか。

2週間前、そのマクドナルドに2人の強盗犯が入ったんです。1人は散弾銃持ってて、40人以上のお客さんがいてたんですが、入るなり天井に向かってズドン、散弾銃ぶちかまして、「床に腹這いになれ！」みんな腹這いにベチャーと。もう1人が「金渡せ！」日本円にして24万円ふんだくって出て行った。

実は、お客さんの中にフランス特殊部隊の兵隊が11人おったんです。

GIGNと言って、対テロ対策専門・人質解放専門の国家憲兵隊治安介入部隊。

彼らは私服で、戦闘服なんか誰も着てないから、犯人はまさかそこに人質問題解決の対テロ戦略のプロがいるなんて分からないので、ズドンと我が物顔に振る舞って出て行った。

2人が出て行くと、この11人が見事なチームワークを作動させて、あっという間に「待て。」

ドキッとして階段で躓いた1人をまず捕獲。しかし、もう1人は散弾銃持ってる。

「止まれ！」と言った時、兵たちに銃を向けた。彼らも銃を持ってる。

「降ろせ！」と言っても降ろさない。「降ろせ！」降ろさない。威嚇射撃バーン。降ろさない。それで腹を撃ち、のたうち回っている彼を捕獲して病院送り。そうして2人とも逮捕しました。

こうして円満に解決したけど、後で、お客さんの中から不満というか疑問が出て来たんです。

「えっ、11人も特殊部隊の兵隊おったん？ それやったら、犯人が入って来るなり、すぐに捕まえてくれたら良かったのに。こんな汚い床に腹這いになって、屈辱的なこと経験せなあかんかって。

11人もおって、9人は銃持ってた。向こうは2人しかいてない。やっつけよう思ったら簡単なはずや。何で、すぐにやっつけてくれへんかった？」

これが映画やったら、すぐパパパパ解決！ やろうと思ったら出来たんですよ。

しかし、彼らは犯人逮捕だけが目的じゃなかったんですよ。

いかにマクドナルドのお店の器物損壊を避け、同時に、お客さんをも無傷のまま開放するか。

“とにかく、やっつけたらいいんだ！”なら、すぐさま出来たかもしれない。

だけど、犯人だけ捕まえて、後はお客さんも店舗も何一つ被害を被らない完璧な救出をするために、敢えて、彼ら自身が最初に腹這いになったんです。

プロの仕事というのは、素人が見た時、時に遅すぎるように見えることがあります。

働いてないように見えることがあります。物足らないように見えることがあるんですね。

しかし、プロにはプロの仕事のやり方がある。プロはベストの方法を採って解決しますが、素人にはそれが見えないので、ナンセンスに感じてしまうことがあるんですね。

3年半、神はなぜ介入してくれないんだ?! 神には神の深ーいお考えがあるんです。

「必ず反キリストが支配する時代を、この世界を終わらせる。」

だから、こう言ってるんです。「この時点から3年半、あと42か月待ちなさい。」

翌月になったら「あと41か月待たらしい。」「指折り数えて待ちなさい。わたしは必ず解決するから。」なので、ここに、**聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。**

忍耐と信仰は何に基いて生まれて来るのでしょうか？ 約束の言葉に基いて生まれて来るんです。

約束の言葉とは、**捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣で殺されるべき者は剣で殺される。**

